

令和2年度 第2回 高知県立図書館協議会・高知市立市民図書館協議会
議事録

○日時

令和3年3月26日（金） 10:00～12:00

○場所

オーテピア 4Fホール

○出席者

別紙出席者名簿のとおり

○開催内容

1 開会

市民図書館館長あいさつ

出席者紹介

議事録署名人の選出

2 議事

(1) 令和2年度事業実績及び令和3年度事業計画について

(2) オーテピア高知図書館サービス計画推進委員会について

(3) その他

3 閉会

県立図書館館長あいさつ

○議事録（※議事内容について事務局から説明後、意見交換）

（1）令和2年度事業実績及び令和3年度事業計画について

（委員）

コロナの感染拡大の中での取組は大変だったことと思う。人と関われない、人と交われない中、オーテピアとしていろいろな取組が十分にできなかったとは思いますが、その中で着実に取組を進めていかれたと先ほどの説明を聞いて感じた。

引き続き感染拡大等があるので、これからも取組をよろしく願いたい。

（委員）

駐車場について。私は日曜日はあまり図書館に来ないが、先日アートアクアリウム高知の開催日に来たところ図書館の駐車場に入れなかった。その日は駐車場に駐められないことについて、新聞に書いてあったのかもしれないが知らなかった。どこからも入れず、結局ひろめ市場に駐めた。そこで、私は委員なので駐車券は割引のスタンプを押してもらえることを知っていたが、他の人はどうしたのかと思った。館内を少し見てみたが、民間駐車場に駐めてもオーテピアの割引スタンプをもらえるということは書かれていなかった。自分は割

引スタンプについて知っていたけれど、他の人はひょっとしたらそのまま払って帰ってしまったのではないかと思った。少し不便だったので、そういうことを周知していただけたらと思う。

図書館の中は結構いっぱい、受験シーズンだったので子どもたちがしーんと一生懸命勉強していた。「話せる図書館」だが、普通の図書館のようにしーんとしているのが印象的だった。やはり家に部屋がない、兄弟がうるさいという人の勉強場所になっていると感心した。

資料2「令和2年度事業実績について」の8番「視聴覚資料の利用状況」について。マイクを借りられるなんて全然知らなかった。青少協のイベントなどでも、マイクをどこから借りるかいつも問題となったり、誰かから有料で借りたりしていた。今は飛沫の問題とかがあって消毒とか大変なので、あまり利用が増えても大変なのかもしれないが、事務局の説明では広報が足りていないということだった。イベントにマイクとかは必要なのでこういうことをみんな知ったら、利用するのではないか。

それから、アニメや映画のDVDが利用できることもあまり知らなかったので、子どもたちがもっと借りられたらいいと思った。広報ももっと、一般の人が見られるようにしてほしい。

(事務局)

駐車場については、アートアクアリウム高知の開催日が、当館の4階で高知市のスポーツ振興課主催で行ったオリンピック聖火の展示とちょうど重なっていた。他県で行った同様のイベントで多くの方々が来られてかなり混雑したという事例があったため、ソーシャルディスタンスをとるという観点で駐車場を閉め、そこで受付をしてから4階に上がってもらうという運用となった。図書館では1週間以上前から様々なところで告知していたが、その広報が広がらなかったことについては反省している。

館内での自習について、聖火展示はホールで実施する計画だったので、私どもも学習室はオープンしたいと考えていたが、県警本部から警備の関係で、4階は聖火の展示に来られた方以外の来場を禁止してもらいたいという要望があったので、学習室も閉鎖した。その関係で生徒たちが2階、3階で勉強していたと思う。

(事務局)

視聴覚資料の機材について。資料2「令和2年度事業実績について」の8番「視聴覚資料の利用状況」にあるように、当館では資材を保有しているが、視聴覚機材を利用できる団体が限られており、一般の方には貸出ししていない。公共的団体にこれらの備品がないという状況から、一定基準の下で学校、社会教育団体等にお貸ししている。青少協も利用できる団体に該当すると思う。

ただ、利用できることを知らないという点では、広報不足だと思う。ホームページなどに

掲載してあっても、なかなかそこまで見に行かないと分からないという状況があるので、その辺りも改善をしていきたいと思う。

(議長)

ご指摘があった広報や駐車場の問題というのは開館当初からの問題なので、また対応をよろしく願います。

(委員)

資料に目を通す中で、オーテピアのこの取組の素晴らしさを再確認した。本当にあらゆる分野ですべての方が学習、教育ができる、そして物を知ることができる。そういう構想を常に考えて県民のために、このオーテピアの方が尽力していることがすごく分かった。

市町村の図書館との連携について質問する。市町村にはない資料等をオーテピアから借りることもあるが、どのような資料が市町村で多く活用されているのかをお伺いしたい。

とても感動した点について、学習室は、近くでその課題に対して調べることができる環境がある。子ども一人一人の個に応じた学習の場がオーテピアにもあるのだということを確認した。

また、視覚障害者、聴覚障害者の方を含むすべての県民の皆さんが、読書ができることに感動した。ほんとにすべての方が活用できるというところを十分皆さんに知らせる方法はないだろうか、もったいないという気持ちがある。

オーテピアの構想がこれから先、3年度、4年度と続いて、また新しい分野でもすべての方がわくわくどきどき活用できるようなオーテピアになることを期待している。

(事務局)

障害のある方々を含めたすべての方が、活用できるような方法がないかというご意見について、アンケート調査においてもバリアフリーサービス自体がまだまだ認知度が低いという実態が明らかになった。

そこで、私どもは、障害者手帳を交付する際に、オーテピアのバリアフリーサービスのチラシをお渡しする手段を早速講じた。また、先日は県、市立の特別支援学校に直接お伺いし、各学校の校長先生とお話をさせていただいた。そこでオーテピアが作成した様々なバリアフリーに関するチラシ、周知文を各学校にお返しすれば、保護者の皆様にも周知できるという方策も提案いただいたので、そういう対策も講じていきたいと考えている。

市町村図書館への支援の質問について、県立図書館の使命として、県内、市町村、そして県立学校等の図書室を支援していくという独自機能がある。市町村については、人的支援、物的支援の双方を実施しているが、具体的な数字については担当から説明する。

(事務局)

どういった本に市町村からのニーズが多いかについて、大人の本では、市町村によって多少の違いはあるが、一般的に人気がある本で、本来であれば各市町村で購入するのが一番よいと思われる本が多いという印象がある。やはりどこの市町村も資料費が厳しい、あるいは図書館自体がないという町村もあるので、そういった本が一番のニーズとしてある。

予約、申込みがあったときに、各図書館の資料費の状況なども考えて、購入した方がよいと思われるような本であれば、こちらから相談して購入を促すこともしている。

特に、テーマに沿った展示を積極的にされる図書館もあるので、今年度では感染症やSDGsなど、そういったテーマの貸出しも多くなっている。

児童書については、調べ学習で使うような本のニーズが多いのではないかと思います。

(委員)

コロナ禍において非常に努力され、すごくよくやっただいただいていると思う。私は障害のほうに少し特化して言いたいと思う。障害をお持ちの方の利用について、職員の皆さんの印象として、昨年や一昨年と比べて、増えているのか減っているのかが分かれば嬉しい。

それから、点字図書館と言われていた頃と比べて、今の声と点字の図書館になってからのほうが利用がしやすくなったという声をよく聞く。利用する方々にとっては非常に嬉しいことだと思う。分館の行事は、障害に特化したテーマのものが結構多く取り上げられていて、非常にありがたい。

障害者理解への取組や障害者へのサービスは、偏りがないように行うことが大事なので、分かってもらおうというのが一番手っ取り早い、課題解決に向けての一步だと思うので、こういうのはずっと取組に入れていただくとありがたい。

(事務局)

バリアフリーサービスの広報について。まだまだバリアフリーサービスについては周知が十分でないと感じている。そのため、新しい取組も始めたところ。まずは知ってもらうことが何よりだと思うので、今後図書館側からプッシュ型の広報として、例えばオーテピアのウェブ・サイトに掲載したというだけではなく、いろいろなところに行くなど広報のやり方自体も考えていく必要があるかと思っている。

バリアフリーに関する資料・サービスについて、大活字本やLLブックの充実も必要だと思っている。また、対面音訳サービスを利用されている方々も多くいるので、コロナ禍において、今年度は急きょ、スカイプを利用したリモートによる音訳も司書が自ら考えて取組を始めた。

まずは多くの方々にこのサービスを知っていただく。それが一番大事だと思っているので、引き続き取り組んでいく。

(委員)

ビジネス支援を行う立場としてお話しする。まず、日頃から図書館の皆様とコミュニケーションをとる中で、図書館の職員の皆様は自分で考えて自分で行動する。あるいは、チームで考えてチームで行動するというのが随所に見られて、とても助かっている。こういう組織ができているところがまずは素晴らしいことではないか。

コロナについて、やはりコロナの企業経営、事業者への影響というのは非常に甚大なものがある。企業の経営者の仕事とは何かということを見ると、ある意味、風を読む仕事、帆掛け船とか帆船の船長さんのような仕事かなと思う。この船長さんである経営者は風を読んでいくが、平時はこれまでの事業の延長線上で経営ができるので、特に情報を仕入れるという頻度はそれほど多くはないと思う。

ただ、コロナ禍は平時に対して非常時なので、通常は追い風だったのが非常時には向かい風になる。その向かい風に対して、帆の角度をどう変えていこうとか進むべき目的地を変えていこうとか、いろいろなことを考える。そのためにも風を読む時間に非常に多く時間を使う。そういう意味で、この非常時には図書館のニーズが変わってくるということを我々は認識しておかなければいけない。

図書館へのニーズは平時と非常時では違うということをはっきり意識をして、ビジネス支援をお互いにやっていかなければならない。例えば、平時であればビジネス経営者はいろいろな知識を知りたいと思うので、思いがけない出会いを求めているいろいろな本を探しに来たりとか、あるいはこの本を見たら隣にいい本があったというふうに、ゆっくり探していくことをする時間が比較的にあると思う。この非常時には、このことを知りたい、直線的に早くその情報を手に入れたいという思いで活動されていると思う。ウィズコロナの時代がしばらく続くと思うので、この非常時というフェーズにあることをぜひ共有認識をしてもらって、知りたい情報を早く手に入れたい、生き残るためにはそれをやらないといけない人たち、経営者の方が今、高知県内にもたくさんいることを考えながら、ぜひこれからも頑張ってもらいたい。

例えば、「ビジネスの風を読むことができる図書館だよ」ということをメッセージとして明確に伝えていくことも、もしかしたらコンセプトとしてあるのではないかな。

(事務局)

平時ではなくて非常時であることについて。特にレファレンス等は本当に早い回答を求められているということは実感している。また、ビジネスの風を読むという部分では、今回のコロナを踏まえて、都市部でなくても田舎に来てリモートで仕事ができる時代になっている。そういった方々のために移住、定住のセッションとコラボをしながら、例えば「オーテピアを使って仕事ができますよ」という情報発信を今始めたばかりなので、今後そういったことに注視をしながら進めていきたい。

(議長)

これからのサービス計画に生かしていただけると思うので、事務局の方もまたそのあたりをよくお考えくださるようお願いする。

(委員)

サービス計画の2年、3年目としての捉え方として、第1期サービス計画の策定をされて基本の理念のもとに縣市合築の施設として互いに機能を生かしながら取組を進められて、まだまだたくさんの可能性を持ち合わせたモデルとなる図書館として着々と根付いてきているのではないかと感じた。

そして、策定当時、想定外であったと思うコロナ感染によって後押しされたようなかたちで電子図書館の貸出しも急増するなど、これからの新たな図書館の在り方も見えてきたような気がした。これまでの取組の成果とともにあげられてきた課題を、サービスや取組として具体化して、県の図書館として、市内、県内全域にわたる支援をさらに続けてもらったらいいのではないか。

アンケート調査について。見込みと実施状況の数を見たところ、1（利用者満足度調査）、2（関係機関・団体）、3（バリアフリーサービス）、5（市町村支援）のアンケートについては、相当な回収率があるけれども、行政職員のアンケートのところは数が少なかったのでは。取組を見たら、研修会とか新人研修とか、高知市であれば保育所の役員研修を実施したということも書いているので、やはり行政職へPRが必要。オーテピアは、こんな素晴らしいところなので活用できるようになればいいと思った。

(議長)

アンケート調査とその結果についての質問があった。少し詳しく経緯や傾向など、事務局から説明を。

(事務局)

今のご意見、本当に同じことを感じている。行政職員のアンケートは回答率ももっと高いと思っていたので、低いことにはがっかりした。要するに、残念ながら今までの図書館がそれほど行政には頼りにされていなかったということ。そもそもアンケートに答えないということ自体がそれを示しており、そこは反省点だと思っている。そこで、あまりはかばかしくない結果を受けて、行政支援の担当を明確に置き、メールマガジンを出すなど、アピールに努めている。

もともと図書館を非常に利用してくださっている方もいるが、どちらかと言うと、同じ行政でもいわゆる本庁舎よりも、農業の専門機関や博物館の方など、いわゆる出先機関と言われているところの方のほうが従前から利用が多くあった。残念ながら、いわゆる本庁舎の真ん中あたりの人の利用が少ないのは、ある意味由々しいこと。気合を入れて、取り組んでい

かないといけない。自治体のために貢献しなかったら図書館も意味がないので、その体制で臨んでいる。

(議長)

アンケート実施、結果、その評価となると、これは非常に広範囲にわたって時間がかかる。期待していた部分もあるし、期待が外れた結果も出るかと思う。今後の活動にご利用いただけたらと思う。

我々もすべてに目を通すのはなかなか難しいと思うが、ポイントを見て、いろいろなことを学ぶ必要がある。

やはり広報の関係、望まれる図書館を考えるというのがぜひ必要だと思うので、頑張ってもらいたい。

(委員)

各委員から話があったようにコロナが今年度、非常に大きな要因であったかと思う。

サービス提供について。資料3(感染症拡大防止等による休館時のサービス提供)。様々なサービスを「前回実施」として対応され、今後については「前回非実施」という方向でサービスを提供していく準備もある。通常的な開館はぜひ続けていってもらいたいと思っているが、それについても対応しており、非常に安心している。

なお、県民市民の皆様の不安感としたら、小学生ぐらいの子を1人で行かせて大丈夫なのかということがあると思う。また、例えば、絵本を借りに来る子どもの場合、来るときはマスクをしているが、館内を歩き回ってどうだとか、誰かにくっついてしまうということもお子様なので当然あり得る。その辺でもきちんと感染防止対策をやっているとアピールすることで、利用者の方に安心をしていただければよいと思う。また、当初オーテピアが開館した頃のように、とにかくオーテピアに行っていればなんか面白い、子どもは元気になっているとか、そういった姿が戻ってくれたら非常にいいと思うし、まちの活性化も実はそこも鍵ではないか。

抱っこしないといけない子どもを抱えて買物するのは往生する。実は基本構想の策定時にも、オーテピアで子どもを楽しませて、その間に街で楽しんでもらいたいという意見があり、それはやはり活性化ということにつながる。子どもさんが自由に1人で遊べるような場が科学館や図書館だったりするのは非常に素晴らしい文化的なまちだということで、それに適う取組をまた引き続きお願いしたい。

ウィズコロナについて。これは残念ながら、当初言われていたアフターコロナはなかなか来ないのではないかと、私も本当に危惧しており、ウィズコロナが長引くのではないかと考えている。そんな中で緊急に資料を集めたい、見たい、対応をスピーディーにしてほしいということがある。もう一つ大きな柱として、産業や県民市民の皆様の生活が長期的に変わるとしたらどう変えたらいいのか、どう変わったらいいいのか。さらにそれで、街や産業の活性

化、これを守るといふところをどうやっておさえていけばいいのかという辺りが、やはり県全体、そして高知市にとっても大きな課題だと思ふ。

そういう意味で、やはり行政の人も一生懸命オーテピアへ来てほしい。また行政の方だけではなく一般の県民市民の方もオーテピアに来ていただいて、何かヒントを見つけていただけたらいいと思ふ。もちろんサービスの広報も大事だが、大きなところで文化的な中心になってほしい。

そういう観点で、1日当たりの個人貸出件数が逆に増えていることは、地元の人間として本当に嬉しい。これだけ苦境があっても皆さんが本を読んでいけば、復活する。そこには希望もあれば未来もある、アイデアもある。そんな中で、高知県、そして高知市がウィズコロナの時代においてもさらに進んでいく。コロナになって業績が上がった業種や分野もある。そういったことも参考にしながら全県全市の発展を考えていくことが大事。

ウィズコロナの中で資料も大事。オーテピアの皆さんを非常に尊敬しているのは、この資料費の維持。市民図書館は減額なしで、県図書館は1.5%弱。防衛ラインは守られている。その意味では、オーテピアの皆さんの尽力にも非常に感謝している。また、県議会、市議会で、県民市民の代表の先生方の理解も得られたということは、それだけオーテピアが大事だと思っただけだったということで、委員の1人としても非常に嬉しく思っている。

ウィズコロナの中でさらに足が止まった方々もおられ、例えば障害者の方はやはり出歩きにくいところがある。そういう中でも、スカイプ等を使って在宅でも受けられる図書館サービスをより一層、広報の充実をさせて、すべての方がオーテピアの旨み、楽しさを享受できるように進展してほしいと思ふ。

スタッフの皆様は非常に過剰な勤務になっていると思ふ。この実績や予算を見れば分かる。この予算減で資料費をこんなに維持したら、すさまじくし寄せがいつているに決まっている。スタッフの皆様は、期待も増えて仕事も増えるのに、裏打ちされる予算は、資料費以外なかなかないかも知れない。逆に、このコロナの時代で県民市民の皆さんからは、より一層期待が高まっていると思ふので、引き続き尽力いただきたい。

(事務局)

コロナ禍において、それぞれのサービス担当の司書が自ら主体的に、私たちはどうすべきか、どうやってこのサービスを県民、市民の皆様、市町村の図書館の方々に提供すべきかということを考えるすごくいい機会になった。動画の作成や、スカイプを使ってみるとか、創意工夫し、知恵を出し合っ、日々いろいろなかたちでサービスを進化させている。

今後、デジタル化社会を迎える中で、図書館としてどういうかたちで新しい社会情勢の変化に対応していくか。そういうことにも果敢に挑戦していきたいと思ふ。

行政サービスについて、認知度不足でがく然とした。課題解決を支援する図書館としては、産業部局や福祉部門等との連携は必要不可欠。例えば産業分野では、産業創造課やデジタル化などを進めている課、移住促進課などと連携を密にし、オーテピアで取材をしていただく。

例えば、リモートワークをしている方、移住を実際にされた方、そういう方々にオーテピアで取材をしていただいて、動画をつくったりフリーペーパーをつくったりして、県の移住政策、産業創造、シェアオフィスなどをPRするときにオーテピアもセットでPRしていただく。そういった取組も始めた。

行政サービスの認知度不足や、業務に役立つと知っていても図書館が使われていないというのは事実なので、今後様々なかたちで連携をしていきたいと思っている。

加えて、令和3年度、人事で県教委のほうにも司書という職名で1名職員を派遣し、まずは足元から固めていきたいと考えている。

(事務局)

一番の問題として、いろいろな資料もあり人もいるのに、その情報が届いていないということでは、プッシュ型も必要。やはりターゲティングをした相手に届くような情報の提供をする。アウトリーチで各施設や団体に出かけて行って図書館の利用や様々な情報提供をすることで、相手に応じた情報提供ができるのではないかと考えており、それが新たな顧客の開拓につながっていくだろうと思っている。

ウィズコロナでデジタル化を進めていき県が主体で行っている電子図書館の資料を増やしていくとともに、館に安心して来ていただく点については、手洗いを含め図書館フロアでのコロナ対策を実施している。もちろん消毒等はやっているが、対面に座っても相手に影響がないようなフィルムを貼るなどの整備がようやくできたところ。今後、今まで制限をしていた人数についても一定緩和することができるのではないかと考えている。

(議長)

今の時代をどう読むかというあり方が重要。いわゆる古いものの考え方と新しいものの考え方がせめぎ合うことになる。古いものを何とか維持したいグループと、できる限り新しい方向へというグループがある。そこへコロナといういつ果てるともしれない、そもそもコントロールが可能かどうか分からないような要素が入ってしまった。ではこの先の展開をどう読むかというところ。

その展開を読むためにはやはり、正確な情報をいかに得るかということが重要になる。そういう時代に置かれてしまったと言ったほうがよいと思う。高知の場合はそこにさらに、大地震が待っている。そういう状況で、皆様に情報を発信するところであるオーテピアが自身をどういう位置づけにするかということ。

実際の活動は非常に細部にわたるが、大きな方向性ではやはり「オーテピアはどんなふう

に時代を読むのですか」という問いかけなのだろうと考える。その辺も今後の計画に生かしてもらいたい。

予算獲得に関しては本当に頑張っていたと思う。ただ、どう考えても好転が見込めない状況なので、その中で活動はどうしていくのかが大切。これが一番具体的な話になる

だろう。

(2) オーテピア高知図書館サービス計画推進委員会について

(議長)

かなり抽象的なお話もあり、案の段階にあることだが、ご指摘があれば。

(委員)

コロナがこのまま続くようであれば、オーテピアに来館される方も減ってくるのではないかと予測する。例えば、インターネットの中でオーテピアのサイトを開いていくと、どういふ本があるのかというのは見ることができる。例えば、見たい本があるときに近くの図書室で受け取るサービスをやっていると思うが、そのような取組をもっとアピールしていくことも大切ではないか。

(事務局)

オーテピアにリクエストしていただいた本は地域の図書館でお貸しすることができる。新たな取組として、3月からショートメッセージサービス(SMS)を活用した予約連絡方法のサービス提供も始めている。

(事務局)

先日、図書館情報システムを少しバージョンアップした。インターネットで高知県内の図書館を一括して、大学図書館も含めて検索できるシステムが以前からあるが、かなりタイプが違うものに更新した。

そのため市町村立図書館、あるいは図書室などでインターネットを一般の方に提供できる環境さえ整備してもらえれば、ご自分が端末を持っていなくても地域の図書館等に行けば横断検索ができるようになっている。

ただ、残念ながら市町村の図書館では、そこまでの環境がないところのほうがまだ多いのかもしれない。今後、新しい図書館に建て替わっていくところでは導入計画もある。すでに横断検索環境があるところでも、市町村でもインターネットが使える端末を1個でもいから図書館に置ければ、そういう環境をとたんに提供できるようになっている。

(委員)

コロナが増えると来館者は減ると思うが、イオンとかに行くと若者がたくさんいる。あちらは来客が減りそうもなく、あのうちの何人かは図書館にも来てくれたと思う。それから、イオンはいろいろなものがあって娯楽の遊園地という感じがするが、こちらの図書館は知の遊園地のような気がする。いろいろな本の見出しを見るだけでも、すごいいろいろな刺激を受けると思う。

不登校の子が今、すごく多い。私が委員をしている市立の中学校は、一つの学校で不登校生徒が22人いる。そのくらい多くて、先生たちも頭を痛めている。そういう子たちは、外に出るのが嫌なのか、学校に行くのが嫌なのか分からないが、オーテピアに来て少し刺激も受けてほしい。本が嫌いな子でも科学館がある。そういうことでも刺激を受けるので、オーテピアに行ってみてほしいと思った。

ほかの関係団体とも協力しているとの説明があったが、子どもたちにオーテピアに来てほしいと思った。自分の関わっている子には、「あそこは知の遊園地だから行ってごらん」と言うが、中3の子でもみんな行ったことないと言うので、少しショックを受けて、「一度行って見てよ」と言う。まずオーテピアに行ってみてほしいと思う。

資料1「令和2年度オーテピア高知図書館サービス計画進捗状況（概要）」の④行政サービスのブックリストについて、私はネットで本があるかを調べるが、年配の方やネットに触れないような人はネットでの資料検索が多分できないと思う。ブックリストは本屋さんにある目録みたいなものかと思う。私は子どものころから大好きで、いろいろなものを集めて、いろいろな出版社のを見ていた。ブックリストの作成が追い付かないと書いてあるので作るのは大変だと思う。行政職員のデータベースの活用が少ないというのもなぜかなと思った。

（事務局）

ブックリストについて、大半の公共図書館には本の目録データがある。年間8万点も本が出るので、その目録を全部作っていると仕事が追いつかないのでデータを購入している。そのデータの中に、現在は本の紹介が200字程度入っている。ただ、それは著作権があるものなので、通常はやたらに利用ができないが、この図書館はデータの提供会社と契約上、その紹介文を当館で作るブックリストで使っていいという契約を交わしているので、ブックリストにそのまま載せることができる。そういうことも生かしながらどんどん作っていきようにしたい。

（事務局）

全体的に認知度が不足しているということは本当にそのとおりだと思っている。新たな取組として、県教委と調整し学校での1人に1台タブレットを導入するにあたり、タブレットのパスワードを発行する際に、オーテピアの電子図書館のアカウントも同時に発行できる仕組みを検討している。それが実現すれば、小、中、高、特別支援学校も含めて、タブレットを持っている子どもたちには電子図書館のアカウントを発行できる。高知にはこういう電子図書館がある、その中には当然オーテピアのこと、オーテピアが実施するイベントや本の紹介なども閲覧できるようになる。

加えて、オーテピア自体の本ではないが、青空文庫とか著作権切れの無料で読める本もあるので、様々なかたちでいろいろな子どもたちに情報提供していきたいと考えている。

(事務局)

科学館の話も出た。私は、科学館の計画も一緒に進めているので、科学館とのコラボレーションという意味では、聖火の展示イベントもそうだが、様々な事業をオーテピアで実施している。この図書館で実施する事業と科学館とでコラボした情報提供もしている。なお、科学館でいろいろな事業をやる時に、こちらのほうから本を持って行って科学館で展示することもしている。

例えばプラネタリウムだったら、単に星を学ぶだけではなく、月に一度リラックスプラネタリウムというのも昼間やっており、来ていただいてゆったりしてもらっただけでもある意味ではメンタルが落ち込んでいても、星を見てもらって少し気晴らしになるかなと思う。いろいろなところで活用いただけたらいいと思う。

(議長)

私の個人的な意見では、ブックリストは司書の方々の実力を発揮する場だと思っているので、大変だろうがぜひ頑張ってもらいたい。貴重な資料があるということと利用の仕方の広報を合わせてお願いしたいと思う。

(委員)

第2期計画の方向性の基本理念、「これからの高知を生きる人たちに力と喜びをもたらす図書館」は変わらないが、これは素晴らしいこと。これがすべての取組の一つの頂点だと思う。そういった中で、図書館も社会の変化に対応し、従来の図書イメージを脱却した取組がオーテピアではできている。さらにそれを充実させることで各課、教育等の分野にも素晴らしい効果が生まれるのではないかと思う。

最近、社会の変化に伴って小中高と大変な思いをする子どもたちが多い。従来は特別支援学校へ入る子どもたちでも地域で見守りながら育てるという方法も増えてきている。そういった中で、充実した機能を情報提供することによって、子どもたちにより良い豊かな教育が営まれることができると思った。それはやはりICT、WEB会議などを今もまさにコロナ禍の中でやっている。しかし、それだけではいけない。実際に、図書館でいうところの空気というか、本を手実際に触るというか。ウィズコロナでこれから先はICT活用をして図書館活動を広めることも大事ではある。

しかし、感染のことを考えながら、来館することも考える。それには人数制限とかいろいろな取組が必要だろうけれど、やはりこのウィズコロナがあって、各市町村立図書館もオーテピアも閉まったときに一番しんどい思いをしたのはやはり県民や町民、市民の方々に、図書館はいつ開いてくれるのかという雰囲気があった。市町村でさえ、閉館したときにインターネットでどこからでも予約ができる取組に切り替えた。そして、窓口まで来ると用意されたものをパッと提供できる取組に今、市町村でも変わっている。オーテピアはこれだけの素晴

らしいスタッフで本当にきめ細かな取組ができていますので、そういったところをできる対策を私たちは今後考えていくべきではないかと思う。

コロナは長引くと思う。社会はどんどん変わっていく。その社会の中を生きるために一番大事な図書館をオーテピアが充実させてほしいと思う。それで進化型図書館という名称があると思っている。

I C Tは各学校に入っているが、うまく機能しているかどうかが各市町村の大きな問題。そういう観点からも最先端の発信をすとか、県教委とともに連携しながら材料、教材等の提供もやってもらえるとすごくありがたい。

まずは、これから先の社会の変動に伴って、それでもオーテピアは開いているよ、オーテピアに来れば何かができるよという取組を行ってもらいたいと思う。

(事務局)

電子ももちろんこれからのデジタル化で大事な部分だが、やはり実際に本を手にとる喜び、選ぶ喜びや、直接来館していただくことが大事なことかと思う。

先ほど 関係機関と連携した不登校の子どもたちへの取組について説明した。教育センターのメニューの中で仮想教室をやっているが、今年度、教育センターと連携し、仮想教室で図書館司書が1コマもらい、図書館の活用について子どもたちに説明をさせてもらった。学校にはなかなか行きにくいけれども、オーテピアに来たらこんなにたくさんいろいろな自分の好きな本を選ぶこともできるし、自分の時間を自由に楽しめることもできるということを教育的ケアを通じて、子どもたちに伝えていきたい。

(事務局)

図書館ではなく科学館の事業になるが、今回のコロナの関係で閉館しているときに、科学館でも動画を作成しYouTubeにアップしていた。

内容は、学校ではなかなか取組ができないような実験を科学館の職員が行って、それを見てもらうもの。こういったものを集めて提供していくことで各学校での授業でも使ってもらえただけと思っている。

なお、今、このサービス計画は令和4年度からで動くが、科学館でも令和5年度からの中長期計画、約10年を見据えた計画をつくる予定をしているので、こういったものとのリンクもしながら進めていきたいと考えている。

(議長)

例えば、今、我々はこういう旧来型の集合する会をしているが、やろうと思えばオンラインでも可能だというお話があった。この考え方と久寿委員のご指摘は関係すると思う。大学でオンラインの授業でもどこが違うのだろうと、同じように感じた。

例えば、集合する会議だったら、くだけて考えれば、例えば隣とヒソヒソ話ができる。そういうことも実際、我々が生活していく上で大事ではないかという気がする。

だから、実際にオーテピアに来館して棚すべてを埋めた本に圧倒されてみるというのもやはり大事な経験ではないかと思う。今後は当然、「いやそんなこと必要ない、情報さえ伝わればいいのだ」という考え方との競合になってくると思う。極端に振れることなく、バランスをとって図書館活動を続けることになるだろうという気がする。

(委員)

私の立場から言うと、バリアフリーやユニバーサルデザインが推進されるというのが一番だと思うが、すべての書物が電子図書になるかというのと、そうでもないと思う。著作権の問題もあるから難しいところがあるのかとも思う。私の場合は、適当に本を読むのには困らない障害。本を買って読む、あるいは図書館に行ってお本をめくるっていう動作が面白いというか楽しいっていう感覚がきっとあると思う。私は田舎出身なので、移動図書館も何回か来た記憶がある。催し物に近いような移動図書館みたいなのは子ども心にすごくワクワクした。

電子図書館は、例えば今、皆さんスマホとかを持っているので、スマホ世代もスマホでレポートを読むのも果たしてどうなのかとも思う。原始的な本をめくって読む、「ああ、今一片破れてしまった」みたいな失敗した感覚が子ども心に面白くないかなと思う。

私の立場から全部書物にしてとはなかなか言えないが、皆さんがおっしゃったように並行して、矛盾する方向を並行して、盛り上げていかないといけないというのは、今後難しいと思う。

コロナもあり、非来館型の読書が将来もっと増えるのだろうと思う。どんどんそちらに寄せていかないといけないが、現物の本をめくることが後退するのは寂しいところもあって、なかなか難しいのではないかな。

私の場合は、確かに読書に困らないという立場ではあるが、本を読む、あるいは情報を入れるという点で困っている方は必ずいらっしゃるもので、そこは並行して頑張ってもらいたい。

(事務局)

資料のデジタル化や、それと私どもも高知県電子図書館を進めているところだが電子書籍自体がまだまだ新刊に占める割合は少ない。やはり紙ベースの本と比べると電子書籍の市場はまだまだ国内では成熟していないように聞いている。本をめくる、本を開く、手にとる楽しみに勝るものはないと思う。ただ、非来館型サービスを進めていく中で選択の一つとして、こういうものもあるということは周知していく必要があると考えている。

(事務局)

補足すると、電子書籍として出されているものは、かつて出た紙のもので焼き直しをし、出している場合があるので、新刊の何%とは出しにくいですが、基本的に少ない。

青空文庫について、小学低学年向けのコンテンツが圧倒的に少ない。電子書籍サービスで絵本も入れているが、リフロー型と言って文字を自由に拡大して読みやすくする機能があるが、通常のやり方だと絵本では使えない。絵本は大きいので、パソコンやタブレットの画面のサイズでは迫力が全然違う。絵本に関して言えば、紙の本で周りの親しい方が読んであげたほうがよっぽどよい。

研究者によっては読み聞かせという言葉を使わずに読み合いなど、そういう言葉を使う方がいる。ただ読んで聞かせることが目的ではなく、子どもとコミュニケーションがとれるということ。また人によって読み方も全然違う。そういうこと自体も子どもは楽しいし、それが大事だということが強調されている。東京子ども図書館という私立の図書館があるが、そこは今度のコロナでYouTubeでの動画公開を真っ先にやったが、その図書館の方はその点を非常に強調されていた。自分たちもやるけれど、それで子どもにみんな「YouTubeを見せれば、本を読んでいる」と思わないでほしいということをかなり強調していた。実際に、「子どもとやってね」と言っている。

(事務局)

声と点字の図書館。視覚障害者の方のためにということについて。国会図書館だったら納本制度があって印刷物を必ず納めるようになっていて。高知市だと、高知市が発行した書籍、書類については必ず図書館に納めてくださいと周知をしている。そのときに、例えばPDFデータを納入してもらえれば、PDFはテキスト化ができるので、図書館から声と点字の図書館にデータのテキスト化をお願いしている。機械で読むことができれば、少なくとも行政がつくった情報については視覚障害の人にも読んでもらうことができるということになる。

文字だけではなく様々な情報を提供するという点について。今、声と点字の図書館が始めている取組では、建物の設計データが公開されているものを、3Dプリンタで打ち出し、それを手で触ってどういったものがあるのかということを感じてもらう資料を構えている。インドのタージマハール、国会議事堂を3Dプリンタで打ち出したもので、感覚的に触って分かるというような資料を考えている。

先ほど移動図書館がわくわくするというお話があったので報告する。奇々な方から県市にそれぞれ500万円ずつ寄贈いただき、移動図書館用バスを買い替えることになった。3月30日に新たな図書館バスの納車式を行う予定になっている。そういった意味では、各地域に回るバスが新車両になるので、地域の皆様にもご利用いただきたい。

(委員)

資料7「仮称『オーテピア高知図書館サービス計画』(第2期)の骨子案(たたき台)」

の⑤番について。縣市両図書館の独自機能の向上。特に県立図書館のほうの市町村や学校の実態に応じたきめ細やかな支援について書かれている。ここはすごく大事なことだと思う。特に市町村立図書館というのは、おそらく非常に予算も少なくて人の配置も薄い、専門性も低い、蔵書数も少ない。そういう中で一生懸命頑張ってらっしゃると思う。

ここの結びつきをぜひ強くしてもらいたいと思う。

今、オーテピアの組織の中はすごくチーム感が高まっていると思うが、そのチームの範囲を次の計画ぐらいで広げていく。県、市町村を含めたチームという枠組みで、高知県全域の隅々までこのサービスを届けるという体制を次期計画ぐらいから取り組んでももらいたいと思っている。

そのためには、市町村の担当者の方とこういう会議ばかりを開いていても何も前に進まないと思う。例えばワークショップ形式で、こういう分科会を開いて何かアクションプランを一緒につくっていくようなかたちが必要。県が市町村を支援するというよりは、県・市町村が協働して前に進めていくという取組をぜひ進めてもらいたい。もちろんリソースの配分などいろいろ大変な部分があると思うのでその兼ね合いだと思う。進化型図書館とも掲げられて、ICT、AIというものも活用しながらだが、オーテピア、あるいは県全域として、顔が見える図書館とか、あるいは手触り感のある図書館とか親切丁寧な対応してくれる、そういう顔が見える関係の図書館。そういったムードをぜひ維持しながら市町村との連携をぜひ進めてもらいたいと思う。

私は、某鉄道会社に勤めていたが、そこはたくさん駅がある。しかし人口減少でお客さんは減っていく。有人駅も無人駅に変わって無人駅に機械の端末を入れて、そのコールセンターからオペレーターとつながりながらオンラインで画面をやり取りしながら切符を販売するというのをやっているが、多分オーテピアが目指すところはそうではないと思う。

そうしてしまうと、オーテピア対一市民、県民ということになるので、そこに市町村が介在しないことになると思う。その市町村の図書館で働く司書、職員さんの力をつけていただくことも念頭に置きながら、うまくICT、AIを掛け合わせてやってもらえたらと思う。少し難易度の高いことかもしれないが、私も協力させてもらいたい。

(事務局)

県立図書館の使命として、市町村、そして学校の図書館を支援することは本当に重要だと考えている。いただいた意見の中でまだまだこれからというところもあるが、県立図書館として各市町村の図書館が地域の課題解決を支援していく図書館になってほしいということがある。

具体的に土佐市の事例を紹介する。土佐市は技能実習生を中心にした在住外国人が非常に増加している。そこで県の外国人生活相談センターとも連携し、素敵な図書館ができたので、図書館を中心に在住外国人の方々の交流の場づくりについて、図書館を絡めて地域の課題を解決できるような場にもっていきたいと、現在協議を始めているところ。

市町村ごとに解決をしていく様々な課題があるかと思うので、そういったところにオーテピアとしても本を貸すだけでなく、ちょっとしたアイデアや連携先を紹介するなど、図書館を核にした交流の場づくりにも尽力していきたいと思っている。

加えて、市町村の図書館の多くは正職員でない方が実際は館を運営していると聞いている。そういった方々が県が実施する研修にはなかなか出にくいという実態がある。そこで職員によって理解度が違ってくると思うので、入門編からステージごと・分野ごとに、専門企画員が中心になり短時間の研修動画を作っており、全部で約100本以上つくる予定にしている。動画を作れば、研修会場に集まらなくても、いつでもどこでも自分が勉強したいときに司書としての専門性を高めていくことができるのではないかと考えている。

まだまだやらなくてはいけないことはたくさんあり、先ほど提案があったワークショップ形式でのアクションプランというのは本当にいいアイデアだと思うので、今後に生かしていきたい。

(委員)

児童サービスについて。オーテピアに来たとき、お母さんと小さな子どもさんが一緒に来て利用していたときに、子どもが本当に慣れた本の扱いをしていた。小さいときから返してまた借りようとするのが身についてきているお子さんの姿を見た。しかし今、社会情勢の変化の中で子どもたちを取り巻く環境も変化して、厳しい状況の中に置かれている子どもさんたちも少なくない。子どもの活動時間の大半をお預かりしている私たち現場の者の感性もすごく求められているところだと思う。

やはり本との出会いは、小さな子どもたちにとって、心の中によい体験として残っていく。将来その子どもたちが大人になったとき、そしてまたパパやママ、親の立場になったときにつながっていく図書館、本との出会いが大事だと思う。本来、図書館というのは小説や子ども向けの資料を扱うものというイメージが固定されているということもあるが、大人になったときに、仕事を選んだり進路を選んだりするときに、オーテピアのような図書館があってこういう調べ方をしたらそれにたどり着ける選択肢、生きていく選択肢が広がっていくのが図書館の役割の中にもあると思う。今現在のことと、10年、20年先を見据えた取組も大事だと思う。

私も機械が苦手なようやがついていっている現状。新聞で土佐清水だったか、移動図書館のことが出ていて、地域の人が欠かせない存在としてその移動図書館を待っているという記事を読んだ。バランスのとれた取組が大事。こういう状況の中で図書館に行かなくても利用できる仕組みをやっていくと同時に、機械が苦手な人たちも離れたところで待っているのも、機械も使わなくていい仕組み。そういうところも大事に、バランスの取れた地域に愛されて親しまれる図書館づくりも、頭の中に入れて取り組んでいってくれると温かい図書館になっていくのではないかと思う。

(事務局)

ティーンズコーナーでは、ティーンズ部の子たちが選んだ本等が展示されている。先ほど委員さんからのお話にもあったように、人生の選択肢の一つという点では、そういった若い人たちに読んでもらいたい本もたくさんある。

大人が「こういう本がいいよ」と薦めるのもあるが、同世代の人たちが、「こういう本が面白いよ」というところで積極的に本に関わってもらえる機会を設けたいと思う。その中で、サポートしてくれる子どもたちの意見を入れながらコーナーづくりを進めている。そういった部分では、図書館に来てもらうことで新たな出会いが膨らんでいって、将来大人になったとき、親になったときに、本当に図書館があって良かったと思ってもらえるような取組を進めていきたいと思う。

(委員)

私は、サービス計画推進委員会の委員でもある。毎回いろいろな方のお話を聞くたびに非常に参考になり勉強になっている。今回も非常に重要な指摘をいっぱいいただいたように思う。

委員から出てきた分館とか分室とか、市町村とかを通じた本の提供がある。それは、今回の各委員の意見にもつながってくる。例えば、知の遊園地とかめくって読む本の感覚など。また、子どものときからの本との出会いということを踏まえると、ネットワークや、「電子書籍のデリバリー」では終われないだろうということ。

そうすると、高知市が昭和36年からやっている分館分室の意義付け、意味付けというのは、非常に今日的である。当時は、日本先導的で最強とか言われた分館分室システムを、また今日的な意味を持つのかなと思う。

市町村、図書館との連携について。委員も言われていたようにチームの範囲を広げることについて。ネットワークでオーテピア対一県民ということではなくて、図書館を巻き込んだ、図書館を通じたというところにやはり、単に本を貸しているのではなくて、本との出会いをつくるということ。そういうものがいつもあるというのがたぶん委員が言われる知の遊園地ということの一つだと思う。

私もそれが非常に心に響いていて、電子書籍を注文することがあるが、スクロールしきれないくらい、ずらっとタイトルだけ出ていて、そこに本との出会いがあったとも思わないし、これを読みたいとも実は思わない。業務関係で読むが、何か少しそれは違うのだろうと思う。やはり背表紙を見て、表紙を見てめくって、本の匂いを嗅ぎながらこの本面白そうだからうちで読むかという本との出会いはやはり非常に大事。それを2期計画にも明確に入れ込んでいかないといけない。

特に、委員が言われた10、20年先を見据えるときに、子どものときの本との出会いは非常に重要。例えば、めくって読むというのもパーソナリティがいろいろあって、絵で学ぶ方とテキストで学ぶ方と、音で聞いて学ぶ方と個性がある。学生も同じ。そういったことも踏

まえると、委員が言われる「顔の見えるチーム」というのが効いてくると思う。

サービス計画第2期についてもそういったことをさらに検討したい。

(議長)

私も推進委員会の委員だが、なるほどなという意見を拝聴した。今後のプランの作成に生かしていきたいと思う。

事務局のほうは様々な意見、貴重な意見をいただいたので、これをサービス計画の進捗管理に生かしながら、今後の図書館運営に生かしてもらいたい。

12時協議終了

令和2年度 第2回 高知県立図書館協議会・高知市立市民図書館協議会出席者名簿			
			令和3年3月26日(金)
○委員			オーテピア 4階ホール
役 職 等	氏 名	備考	
高知県学校図書館協議会会長 高知市立大津小学校校長	おかばやし ひろえ 岡林 宏枝	欠席	
高知市朝倉ふれあいセンター長 (元高知市立小学校長)	あきもり しんご 秋森 眞五		
横浜小学校区青少年育成協議会代表推進指導員	にしお あつこ 西尾 敦子		
津野町教育長	くす くみこ 久寿 久美子		
高知県少子化対策推進県民会議委員	いのうえ まゆみ 井上 真由美	欠席	
元高知市保育園長	まつざき かずみ 松崎 加寿美		
特定非営利活動法人 こうち企業支援センター 理事長	たむら きしお 田村 樹志雄		
高知大学特任シニアプロフェッサー (元高知大学附属図書館長)	かとう つとむ 加藤 勉		
高知工科大学附属情報図書館長 高知工科大学情報学群教授	しのもり けいぞう 篠森 敬三		
特定非営利活動法人 高知市身体障害者連合会会長	なかや けいじ 中屋 圭二		
○事務局			
所 属 等	職 名	氏 名	備考
高知県立図書館	館 長	山崎 生	
	図書館副館長	上岡 和代	
	専門企画員(司書育成・サービス推進担当)	山重 壮一	
	企画調整課長兼チーフ(企画調整担当)	岡村 祐人	
	チーフ(総務担当)	渡辺 真粧美	
	チーフ(図書利用担当)	谷岡 祥子	
	チーフ(支援協力担当)	尾形 千晶	
	企画調整課 司書	上岡 真土	
	企画調整課 主査	溝渕 里奈	
	企画調整課 司書	鈴木 章生	
	企画調整課 司書	森澤 奈那	
	企画調整課 司書	戸苅 綾子	
高知市民図書館	館 長	森岡 眞秋	
	副館長	高橋 直人	
	図書利用担当管理主幹	武井 一仁	
	主幹図書利用担当係長事務取扱	弘瀬 聖子	
	図書利用担当係長	西内 久代	
	資料管理担当係長	依光 麻希	
	管理担当係長	横川 良明	
高知市 図書館・科学館課	課長	高石 敏子	